

\* 「さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。」 (ピリピ 1 : 12)

パウロはこの時恐らくローマで投獄されていた。自由を奪われることは大変な苦痛である。しかし、彼は逆境、災い転じて福となした。彼が神から受けた使命、すなわち福音伝道がかえって進んだのだという。

「私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。」 (1:13~14)

ローマ総督の親衛隊は、パウロの投獄の理由を知り、今まで聞いたこともないイエス・キリストの福音を聞くことができたのである。また、ピリピ教会の信徒たちは、パウロの獄中の有様を聞いて励まされ、かえって自分たちの信仰が強固なものになり、福音を臆せず語ることになった。まさに、ピンチがチャンスに変えられたのである。

\* クリスチャン迫害の歴史は日本においても多く記録されている。1630年、江戸初期の切支丹禁止令のもと、古河で95名の切支丹が磔の刑に処せられた。また、天皇を神とする国家神道によって国民を統一し、侵略戦争へと進んでしまった過去がある。戦時中、神社は宗教ではないという偽りの口実によって美濃ミッションや韓国教会への神社参拝強要。現在の日本の政治的状況は、その時の再現も有りうるかと思われる。時の権力や脅迫に屈せず信仰に堅く立ち、神のことばを語り続けた私たちの先輩がいる。その遺産を受け継ぎたいと思う。

\* 「人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています。他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。」 (1 : 15~18) 教会の中での争いは古今を問わず、どこの教会でも起こる。それは妬みから来ることが多く、その結果、党派が生まれる。しかし、パウロは、どのような動機であれ、キリストが宣べ伝えられているのであれば、それも良しとするべきと言う。教会の一致は重要なことであるがキリストを宣べ伝えるという教会の第一の使命が見失わなければ、寛容の精神もあり、ということであろう。